

IV 災害時対応に関する 学生意識アンケート調査報告

樋口 義治

1 はじめに

大学BCP（事業継続計画）について考えるためには、大災害時に当事者である学生たちがどのように対応すると考えているかを知ることが重要である。このため、愛知大学名古屋、豊橋キャンパスに所属する学生に対して、大災害時に自分がどのような状態になるかの意識調査を実施した。以下に報告する。

2 アンケート調査

1. アンケート項目と選択肢

災害時対応について、学生たちがどのように考えているかを、表1のように基礎項目、災害関係項目について質問して、選択肢による回答を求めた。

2. 対象と方法

対象：アンケート調査の対象は、愛知大学名古屋キャンパス、豊橋キャンパスに所属する学生であった。人数は全体で505人、男性239人、女性266人であった。

方法：アンケートの実施方法は、関係教員の複数の授業において、質問紙を配り、その場で解答（選択）し、回収する一斉調査であった。実施は2018年11月であった。結果の集計は、アルバイトによりexcelに入力する形とした。

NO. _____

災害に関するアンケート調査

2018年11月

このアンケートは、愛知大学の学生を対象とした、災害に関する調査です。頻発する災害に対して、学生の皆さんがどのような意識をお持ちか調べるものです。結果は研究以外使用いたしません。調査は無記名で、調査への参加は自由で、参加しなくとも何の不利益もありません。ぜひご協力をお願いいたします。

愛知大学中部地方産業研究所災害研究センター 代表 阿部聖
(問合せ先：愛知大学中部地方産業研究所 TEL 0532-47-4140)

以下の設問についてお答えください。

設問1 あなたの性別を選択してください。

- ①男性 ②女性

設問2 あなたの学年を選択してください。

- ①1年生 ②2年生 ③3年生 ④4年生 ⑤5年以上

設問3 あなたが現在お住まいの住所をお書きください。

_____ 県 _____ 市町村

設問4 実家から離れて住んでいる方は、実家の住所をお書きください。

_____ 県 _____ 市町村

設問5 あなたが現在お住まいの住居から大学までの通学時間を選択してください。

- ①30分以内 ②1時間以内 ③2時間以内 ④3時間以内 ⑤3時間以上

設問6 災害時の連絡方法(安否確認)について、家族と話し合っていますか。

- ①話し合っている ②話したことがある ③話したことはない

設問7 最大級の大震災(災害)が東海地方を襲って、その時、あなたが大学にいる場合(授業中・課外活動中)、地震が収まったあと、自宅に帰ることができると思いますか。

- ①帰ることができる ②すぐには帰ることができない ③当分帰ることができない

設問8 震災後、あなたがすぐには帰ることができない場合、どこに留まると思いますか。

- ①地域の避難所 ②大学 ③友人宅 ④知人宅 ⑤野宿 ⑥その他 _____

設問9 あなたが現在お住まいの住居には非常用の食料などの備蓄がありますか。

- ①充分にある ②多少はある ③あまりない ④全くない

設問10 災害時、停電や断水などによって、何が困ると思いますか。3つお書きください。

① _____

② _____

③ _____

設問11 先日実施された大学の防災訓練にあなたは参加しましたか。

- ①参加した ②参加しなかった

設問12 大学の防災訓練はあなたにとって役に立つと思いますか。

- ①大変役に立つ ②多少は役に立つ ③あまり役に立たない ④全く役に立たない

設問13 あなたにとって、災害時、役にたつと思われる情報源は何ですか。(複数回答可)。

- ①TV ②ラジオ ③新聞 ④PC ⑤SNS ⑥携帯 ⑦人からの直接情報

- ⑧その他 _____

設問14 その他、災害に関して思うことがあれば、下にお書きください。

以上です。ご協力ありがとうございました。

図1 アンケート用紙

3. 結果と考察

以下、重要と思われる項目について報告する。質問項目は基礎項目と災害関係項目と分かれるが、必要に応じてクロス集計の分析結果を含むこととする。

【基礎項目】

①性別（設問1）

表1 性別

性別	人数	割合
男性	239	47%
女性	266	53%
合計	505	100%

表1に見られるように、参加した学生の性別では、女性が多少多いがほぼ均衡しているといえる。

②学年（設問2）

表2 学年

学年	人数	割合
1年	109	22%
2年	235	47%
3年	122	24%
4年	35	7%
5年以上	4	0.8%
合計	505	100%

表2に見られるように、学年については、1、2年生で約70%を占めている。

③通学時間（設問5）

表3 通学時間

通学時間	人数	割合
30分以内	95	19%
1時間以内	166	33%
2時間以内	234	46%
3時間以内	9	2%
3時間以上	1	0.2%
合計	505	100%

表3のように、1時間以内が261人52%と多いが、1～2時間以内も234人46%と多い。

【災害関係項目】

ここで災害時の対応についての質問について分析する。必要に応じてクロス集計の結果を示す。

④災害時の連絡方法（安否確認）について、家族と話し合っているか（設問6）

表4 災害時の家族間安否確認

災害時の安否確認	人数	割合
話し合っている	36	7%
話したことがある	322	64%
話したことはない	147	29%
合計	505	100%

表4は、家族内で災害時の連絡方法（安否確認）について話し合っているかを示したものである。話し合っている、話したことがあるで、358人71%の学生は、災害時の安否についてどのように確認しあうのかを家族内で話し合っているようであるが、147人29%は話したことがないようである。このことは、災害時に3割程度の学生とその家族の間で、まず、その安全についての確認方法から試行錯誤することとなり、多大の混乱が生じることを示している。当然、大学に当該学生の安否を尋ねてくることとなり、その対応について大学は覚悟して、事前の準備をしておかなければならないのではなかろうか。

⑤大学滞在時に大地震が起きた後、帰宅可能か（設問7）

⑥帰宅困難時の滞在場所はどこか（複数回答）（設問8）

これらは関連質問なので、⑤、⑥の結果をまとめて考察する。

表5 自宅帰宅可能か

大学滞在時に大震災が起きた後、自宅に帰宅可能かどうか	人数	割合
帰ることができる	65	13%
すぐには帰ることができない	286	57%
当分帰ることができない	154	30%
合計	505	100%

表6 帰宅困難時の滞在場所

帰宅困難時の滞在場所	人数
地域の避難所	73
大学	351
友人宅	60
知人宅	19
野宿	9
その他	12
累計回答数	524

⑤の結果も衝撃的ではなからうか。大学滞在時に大震災が起きたとき、自宅に帰れるかであるが、すぐに帰ることができるのは65人13%にすぎない。すぐには帰ることができないは286人57%、当分帰ることができないは154人30%である。合わせると90%弱の学生が、すぐには自宅に帰ることができないと考えている。もちろん、震災の生じる季節や時間帯を考慮しなければならないであろう。

⑥の自宅に帰れない場合、どこに避難しているかであるが、複数回答である524解答中351人は大学に避難すると考えている。これは7割弱の学生が大学に留まると考えていることを示している。大学としては、ライフラインや生活必需品の備蓄をどのように考えるかを問われるであろう。

図2は性別の避難場所であるが、女性の77%は大学に留まることを想定している。この場合には、女性の滞在のための準備も必要であろう。また、学生といった若い女性だけではなく、愛知大学が公的避難所に指定されていることを鑑みれば、子供や老人、障害者の対策についても一定程度考慮する必要があるであろう。

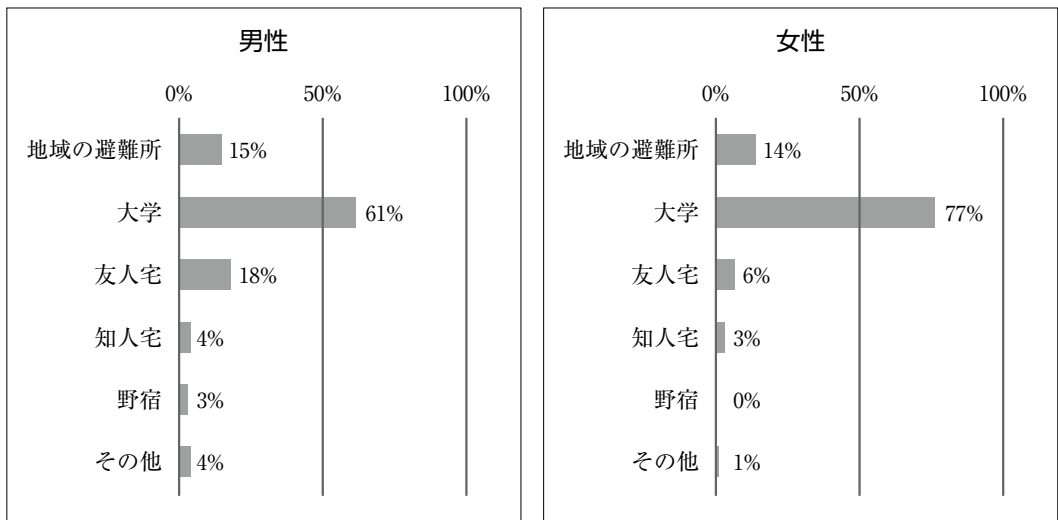


図2 災害時にどこに留まるかに関する性別の違い

⑦非常食の備蓄（設問9）

表7 非常食の備蓄状況

非常食の備蓄	人数	割合
充分にある	43	9%
多少はある	268	53%
あまりない	140	28%
全くない	52	10%
未回答	2	0.4%
合計	505	100%

この質問は自宅における非常食の備蓄についての質問であるが、6割程度の学生の自宅においては、非常食がある程度あるようである。しかし、あまりない、と全くないが4割程度いるようである。このことは直接大学の問題ではないが、家庭における災害時対応にそもそも問題があるのではないかという疑念を生じさせる。

⑧災害時困ること（複数回答）（設問10）

表8 災害時困ること

	トイレに 困る	お風呂に 入れない (シャワー 含む)	水・飲料 水の確保 /水不足	食物確保 /調理	携帯・ スマホ充 電不可/ 連絡手段 の切断	情報収集 /情報の 不足	電気・ガス 等使用不 可/生活 面での 不便	夜、照明 がない (危ない)	環境・ 衛生面/ 体調管理	精神的 苦痛	交通 マヒ	その他	未回答
男性	142	95	81	106	102	47	31	42	65	7	13	8	29
女性	172	143	65	140	113	61	35	39	71	6	9	11	15
合計	314	238	146	246	215	108	66	81	136	13	22	19	44

	トイレに 困る	お風呂に 入れない (シャワー 含む)	水・飲料 水の確保 /水不足	食物確保 /調理	携帯・ スマホ充 電不可/ 連絡手段 の切断	情報収集 /情報の 不足	電気・ガス 等使用不 可/生活 面での 不便	夜、照明 がない (危ない)	環境・ 衛生面/ 体調管理	精神的 苦痛	交通 マヒ	その他	未回答
男性	59%	39%	34%	44%	42%	20%	13%	17%	27%	3%	5%	3%	12%
女性	64%	53%	24%	52%	42%	23%	13%	14%	28%	2%	3%	4%	6%
合計	62%	47%	29%	48%	42%	21%	13%	16%	27%	3%	4%	4%	9%

表8には、災害時に困ると考えていることを複数回答で答えてもらった。多い順にトイレ、食べ物、風呂に入れないこと、スマホの充電、連絡不能であった。これらは災害時にいつも困ることであるが、風呂について第3位（47%）は少し意外であり、学生の清潔に対する強い意識が垣間見える。普通の避難所と少し違う傾向を学生は持っているのかもしれない。

⑨大学の防災訓練に参加したか（設問11）

表9 大学の防災訓練への参加

大学の防災訓練への参加	人数	割合
参加した	233	46%
参加しなかった	270	53%
未回答	2	0.4%
合計	505	100%

表9は、大学の防災訓練への参加状況について質問したものである。参加と不参加が半々であるが、授業の時間帯にもよるのであろうか。

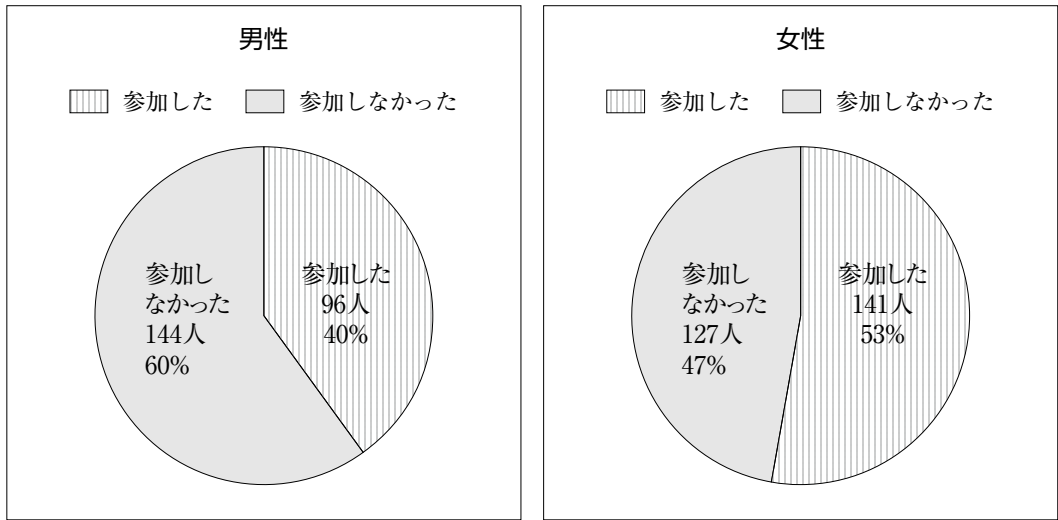


図3 性別防災訓練への参加状況

図3は性別の防災訓練参加の有無であるが、参加したのは女性が多かった。

⑩防災訓練は役立つか（設問12）

表10 防災訓練意識

防災訓練は役立つか	人数	割合
大変役に立つ	47	9%
多少は役に立つ	286	57%
あまり役に立たない	135	27%
全く役に立たない	23	5%
未回答	14	3%
合計	505	100%

表10は、防災訓練参加について学生たちがどのような意識を持っているかであるが、この質問についても7割弱の学生は役に立つと考えているが、3割強の学生は役に立たないと考えているようである。大学として今後の防災訓練の在り方についてなんらかの対応が必要ではなかろうか。

①災害時役に立つ情報（複数回答）（設問13）

表11 災害時に役立つ情報について

	TV	ラジオ	新聞	PC	SNS	携帯	人からの直接情報	その他
男性	109	156	38	29	126	132	65	3
女性	152	151	42	20	137	153	68	2
合計	261	307	80	49	263	285	133	5

	TV	ラジオ	新聞	PC	SNS	携帯	人からの直接情報	その他
男性	45%	65%	16%	12%	52%	55%	27%	1%
女性	57%	56%	16%	7%	51%	57%	25%	1%
合計	51%	60%	16%	10%	52%	56%	26%	1%

表11をみると、全体では情報源として、ラジオ、携帯、SNS、TVが挙げられている。学生たちは災害時の情報源として、携帯、SNSにかなり頼るつもりであろうが、ラジオが一番と考えているようである。性別で見ると少し異なり、男性においてラジオを選択する率が女性よりも多い。女性は携帯、TV、ラジオが並んでいる。

3 おわりに

ここまで、2018年11月に愛知大学名古屋、豊橋キャンパスにおいて実施した災害に対する学生アンケートによる意識調査の結果を見てきた。この調査で注目する点はいくつかある。

まず学生と家族間の災害時の連絡方法（安否確認）についてであるが、3割程度の学生はこの点について家族間で話し合っていないようである。このことから、災害時にパニックに陥った家族から、大学に対して単に学生の安否だけではなく、実際に探してくれなどの要求も含めて殺到することが予想される。その対応について大学は覚悟して、事前の準備をしておかなければならないのではなかろうか。具体的には、かなり早い時期に学生の安否を確認できるシステムを導入しておく必要がある。

大学滞在時に大震災が起きたとき、自宅に帰れるかであるが、すぐに帰ることができるのは13%にすぎず、残りの90%弱の学生はすぐには自宅に帰ることができないと考えている。自宅に帰れない場合には、多くの学生（約7割）は大学に避難すると考えている。このことは大学が学生の滞在に備えてライフラインや生活物資などを準備しなければならないことを示している。

また、女子学生の多くも災害時に大学に留まることを考えている。この場合には、女性の滞在のための準備も必要であろう。また、愛知大学は豊橋市の公的避難所に指定されているので、女性のみならず子供や老人、障害者といった災害弱者が避難してくることも考慮すれば、こうした対策についても考える必要がある。

災害時の情報源であるが、学生たちはラジオ、携帯、SNS、TVを想定している。このことを考慮すれば、携帯の充電などについて、発電を含めた事前の準備が必要であろう。